

『オデュッセイア』の「名婦のカタログ」をめぐって

西村賀子

序

『オデュッセイア』第11歌225行から327行にかけての100行余りは「名婦のカタログ」と呼ばれている。それは、帰国の条件を満たすために冥界に下ったオデュッセウスの前に、神話上の名高い女性たちが次々と姿を現し自己の素性と運命を物語る場面である。このシーンはそれに続くいわゆる「インテルメッツオ」⁽¹⁾ やさらに少し後のミノス王やオリオン、ヘラクレスなどが登場する場面⁽²⁾ とともに、後代の改竄あるいは『オデュッセイア』の最後の校訂者の手になるものという判断を分析派の人々が下している箇所である⁽³⁾。たしかにこの部分は『オデュッセイア』の主な筋の進展に直接に関与するとはいえない。しかし「名婦のカタログ」がこの叙事詩全体の構想と完全に遊離していると断言することはできないのではないだろうか。このような視点に立って「名婦のカタログ」を形態と内的関連性の側面から検討してみたい。

I

『オデュッセイア』は主人公の冒険の叙述を、彼の漂流の最後から2番目の滞在地であるカリュプソの島から始めているが、彼の帰路をクロノロジカルにたどってみると次のようになる。トロイアを出発したオデュッセウス一行はキコネス人の国とロトパゴイ人の国を通過したあと、キュクロプスの地に着き、ポリュペモスを盲目にして危機を脱する。次いで風神アイオロスの島で歓待を受けたあと、故郷を目前にしながらも部下たちの愚かさゆえに逆風によってアイオロスの島に吹き戻される。ライストリュゴネス人の国でほとんどの船を失った後、キルケの島にたどりつき約一年を過ごす。帰国の必

要条件として冥界に行きテイレシアスの予言を聞かなければならないと告げられたオデュッセウスは、ハデスに向かい、多くの霊に出会う。ふたたびキルケの館に戻った一行は、帰路について助言を受け、セイレンの島もスキュラとカリュプデイスの待ち受ける難所も無事に航行する。しかしトリナキアでは部下たちが空腹に耐えかね、禁じられていた太陽神ヘリオスの牛を食べたため、神の怒りによって船は撃沈される。ただひとりオデュッセウスだけが助かり、カリュプソの島に漂着する。彼はこの女神のもとで7年間過ごしたのち、イタカをめざして筏で出発するが、ポセイドンの怒りが嵐を巻き起こす。幸いパイアケス人の国に漂着し救助され、歓待を受けたのみならず多くの贈り物とともに故郷に送り届けられる。

これらの体験は3つのグループに分けることができる。さらにそれぞれのグループは3つのエピソードから成り立っており、そのうちの3番目のエピソードは同じグループの他の2つのエピソードよりもはるかに長くなっている⁽⁴⁾。すなわち第1グループはキコネス(9, 39-61)の23行、ロトパゴイ(9, 82-104)の23行、そしてキュクロプス(9, 105-566)の462行から成る。第3エピソードは第1と第2のエピソードの合計の約10倍に達している。第2グループはアイオロス(10, 1-76)が76行、ライストリュゴネス(10, 80-132)が53行である。これらを合わせると129行になるが、3番目のキルケ・エピソード(10, 133-574および12, 1-143)にはその約4倍半の585行が費やされている。冥府への旅の物語はキルケ・エピソードにさしはさまれる形で第2グループのあとにつけ足される。それに続く第3グループはセイレン(12, 165-200)とスキュラとカリュプデイス(12, 223-259)がそれぞれ36行と37行から成っている。第3エピソードのトリナキア(12, 260-402)は143行で、第1と第2の合計の2倍弱になっている。そしてこの第3グループにカリュプソ・エピソードが付随する。このように、オデュッセウスの漂流譚の叙述は非常に均整のとれた3部構成になっている。

主人公の帰国までの放浪の全容は、一方では帰国をとげたオデュッセウスからペネロペイアへの報告としてクロノロジカルな順序をたどりつつ、きわ

めて簡潔に要約される⁽⁵⁾。他方、一つ一つの冒険は最後の滞在地スケリア島で詳細に語られる。その叙述はオデュッセウス自身の回想的独白という形をとり、非常に多くの行数が費やされる。すなわち、カリュプソの島での滞在からナウシカアによる救助までは7, 244-297で、トロイア出発からカリュプソの島への漂着までは第9歌から第12歌にかけて語られる。妻への報告は『オデュッセイア』の詩人の語りによるものであり、地の文に織り込まれている。それにたいして、作品全体の6分の1を占める主人公の回想は一人称による語りという形で進められる。

オデュッセウスのモノローグはアルキノオス王によって「まるで歌人のように見事にὦς ὅτ' ἀοιδὸς ἐπιστὰμ' ἐνὶ ὠσὶ」(11, 368)と絶賛される。この評価はちょうどオデュッセウスが身上話を始める直前に彼自身が歌人デモドコスにおくった称賛の言葉(8, 487-498)を思い起こさせる。オデュッセウスの漂流談はあたかも靈感をうけた詩人が語るかのように巧みに語られるのである⁽⁶⁾。

文学的技巧の面から分析すると、オデュッセウスの語り口の見事さは規則正しく配分され均整のとれた構造に由来すると考えられる。オデュッセウスの冒険全体の幾何学的な構成についてはすでに述べた通りである。けれどもWoodhouseの分析では、冥界下りの物語は第2グループに付随するエピソードにすぎず、第3グループに続くカリュプソ・エピソードとともに、3部構成の均衡を破るエピソードとして扱われている。言い換えれば、主人公のモノローグを一つのまとまりとして見た場合、そのなかで第11歌だけが例外的な形式をもつことになるわけである。しかしながら、第9歌から第12歌まではオデュッセウスがパイアケス人たちの前で自分の冒険を語る一続きの独演の場面である。それらは相互に関係のある連続物であり、分けて考えるべきではない。古代においても、詩人が『オデュッセイア』の一部分だけを取り出して吟唱するとき、この4つの巻にわたるモノローグは一つのまとまりとして歌われたと想像される。このようにキコネス人の国からカリュプソの島までの冒険を一連の不可分な独白としてながめた場合、冥界訪問の巻だけが規準からはずれているとみなすのは不合理である。

II

そこで次に第11歌がどのような構成になっているかを検討し、モノローグ形式による4つの巻のうちでこの巻だけが他と異なっているかどうかを考えてみたい。

まずオデュッセウスはキルケの島を出発してハデスに到着し(1-22)、彼女の指示通りに招魂の儀式を執り行う(23-50)。最初にやって来たのは部下のエルペノルの亡霊であった(51-83)。彼の埋葬を約束した後、オデュッセウスは母の姿を見かけて胸を痛める(84-89)。とはいえ、不本意ながらもはるばる冥府にまでやって来た本来の目的はテイレシアスに会うことであり、まず彼に帰国の指示を求める(90-151)。予言者の言葉が終わるのを待ちかねたかのように、オデュッセウスは母アンティクレイアの魂をさし招き、言葉を交わす(152-224)。次いでテュロを先頭に14人の女たちがめいめい素性を語る「名婦のカatalog」が225行から327行まで展開される。その後「インテルメッツォ」が挿入される(328-384)。オデュッセウスはアルキノオス王の求めに応じ、さらにアガ멤ノン(385-466)やアキレウス(467-540)と言葉を交わしたこと、アイアスに話しかけたが返答を得られなかったこと(541-567)を報告する。そしてミノス、オリオン、ティテュオス、タンタロス、シシュポスなどの過去の英雄たちの姿を眺め(568-600)、ヘラクレスに出会った(601-627)あと、オデュッセウスは突如、恐怖に襲われキルケの島に戻る。

この巻はA・B・C・A'・B'という5つの部分に分けられる。すなわちエルペノル、テイレシアス、アンティクレイアの三人の亡霊との対話(51-224)をAとするならば、アルキノオス王の要請に応じて語るアガ멤ノン、アキレウス、アイアスとの対話(385-567)も、三人の身近な人々との対話であるということから、Aのヴァリエーション(A')であるといえよう。Aの場面は174行、A'の場面は181行で、長さはほぼ等しい。他方、名高い女たちのカatalogをBとするならば、ミノスからヘラクレスまでの場面は、昔の英雄たちが続々と登場するシーンであり、名高い

男たちのカタログであると考えられる。その意味でこの箇所はBの変奏曲たるB'と解釈できるであろう。ふたつのカタログには用語法の上でも「私は見た」あるいは「私は認めた」という表現が繰り返されるという共通点が見出される⁽⁷⁾。また女のカタログでは冒頭のテュロの記述が最も長い。それとは対照的に、男のカタログでは最後のヘラクレスの記述が最も長い⁽⁸⁾。行数の点ではBは103行にわたって14人の女たちに言及し、他方B'では登場人物が6名で女のカタログの半分ほどであり、それに呼応するかのように行数も60行とほぼ半分になっている。AとA'では、冥界下りの本来の目的である予言者テイレシアスは別として、エルペノル、アンティクレイア、アガ멤ノン、アキレウス、アイアスなどいずれもオデュッセウスと関係の深い身近な同時代の人々が登場する。それとは対照的にBとB'では登場人物ははるかな過去の人々であり、神話上で著名な、しかしオデュッセウスがそれまでに言葉を交わしたことのなかった初対面の人物たちのリストである。従ってAとA'、BとB'とはCの「インテルメッツォ」の場面を中心として対称をなしていると言える。

先述のように、主人公のモノローグ形式による4つの巻のうち、第9歌、第10歌、第12歌はいずれも短・短・長の3部構成であった。第11歌は長さの点では他の3つの巻と同じ短・短・長の様式を取っていない。しかしながら、3つの構成要素から成り、各要素の長さに変化がつけられているという点では、この巻も他の巻と同じく3部構成であると言うことができよう。言い換えれば、様式こそ他の3つの巻と若干異なっているものの、それらを支配しているのと同じの規準が第11歌にも読み取れるのである。

III

第11歌が規則正しい配分原理に基づいていることは以上の分析から明らかである。さらにこの巻の一部である「名婦のカタログ」にも幾何学的な整然とした構成が観察できる。この点を最初に指摘したのはHeubeck⁽⁹⁾であるが、Fenikの一覧表を一部手直しして引用すると次のようになる⁽¹⁰⁾。

テュロ+ポセイドン=ペリアスとネレウス	235-59 (長)
アンティオペ+ゼウス=アンピオンとゼトス	260-65 (短)
アルクメネ+ゼウス=ヘラクレス	266-68 (短)
メガレ=ヘラクレスの妻	269-70 (短)
エピカステ=オイディプスの妻	271-80 (長)
クロリス+ネレウス=ネストル, クロミオス, ペリクリュメノス, ペロ	281-97 (長)
レダ+〔ゼウス〕=カストルとポリュデウケス	298-304 (短)
イピダメイア+ポセイドン=オトスとエピアルテス	305-20 (長)
パイドラ, プロクリス, アリアドネ	321-25
マイラ, クリュメネ, エリピュレ	326-27

この表からわかるように、「名婦のカatalog」の14人の女性たちのなかには息子を2人生んだ女性が4人いる。テュロ、アンティオペ、レダ、イピダメイアである⁽¹¹⁾。ごく手短かに名前だけが言及されているパイドラ以下の6人の女たちを除外し最初の8人だけを取り上げた場合、この4人は一覧表のいわば外枠を形成している。この枠の一番外側にあたるテュロとイピダメイアはともにポセイドンと関わった女たちであり、その記述は長い。それに対して、内側にあたるアンティオペとレダはゼウスと交わった女たちであり⁽¹²⁾、その記述は短い。次に2人息子をもつこの4人の母親たちによって構成される枠の中では、アルクメネ、メガレ、エピカステ、クロリスの4人が言及される。行数の点から見ると、最初の2人（アルクメネとメガレ）の記述はきわめて短く、あとの2人（エピカステとクロリス）についての記述はそれよりも少し長い。いいかえれば、テュロ以下8人のヒロインたちによって作られる第1グループは長・短と短・長の組合せによってできている外枠をもち、枠の内側は短・短と長・長の組合せになっている。

先程いったん除外した第2グループともいえるべきパイドラからの6人は、3人ずつまとまっているがきわめて簡単に触れられているだけである。その3人組のうちの最初の2人は名を挙げるにとどまり、最後に言及されるアリアドネとエリピュレだけにエピソードが付されている。これは第9・10・

1 2 歌で採用されている短・短・長のパターンの最もプリミティブな形と考えられる。

この分け方は非常に整然としており、基本的には妥当なものと思われる。ただこの分類では第2グループが第1グループの付け足しにすぎないかのような印象はまぬがれないし、また2つのグループ間の関連が希薄に思われる。パイドラ、プロクリス、アリアドネはアッティカの伝説上の人物であるから、アッティカで改竄された結果としてこの3人への言及が挿入された可能性がないわけではないが⁽¹³⁾、この3人をも含めて分けるべく修正するなら、次のような分類が提案される。すなわち「名婦のカタログ」の14人の女たちをテュロからクロリスまでの6人とレダ以下の8人に分ける。するとこの2つのグループはどちらも2人の息子を生んだ母親たちで始まるグループになる。そしてそれぞれの記述の長さは、第1グループが63行、第2グループが30行でほぼ2対1の割合になる。

いずれにせよ、カタログに見出されるシンメトリカルな構成を支えている原理はきわめて素朴である。しかし『オデュッセイア』が口誦詩であったことを考えるならば、基本的な構造が機械的かつ単純であればあるほど記憶に有利であったに違いない⁽¹⁴⁾。

IV

以上の分析からオデュッセウスの独白による冒険譚も、その一部である冥界下りの物語も、さらにまたその一部である「名婦のカタログ」も、幾何学的な規則正しい配分によって構成されていることが明らかになった。そこで次にこの節では「名婦のカタログ」の意義の考察に移りたい。

Kühlmannはこのカタログは物語のコンテクストにおいて不可欠ではないし、主な筋や主人公の運命との関連は希薄であると考え⁽¹⁵⁾。Pageもカタログに登場する女たちはオデュッセウスと何の関係もないと主張する⁽¹⁶⁾。しかし先の節で検討したように、形態的に見るとカタログは第11歌の構成のなかで不可欠な部分である。そうであるならば内容の面でも何らかの必然性があるのではないかと考えるのが妥当であろう。はたしてカタログに登場する

ヒロインたちはこの作品の他の場面とまったく無関係であろうか。

カタログがそれに続く「インテルメッツォ」と密接に結びついていることは否定しがたく、この点については分析派も認めている⁽¹⁷⁾。過去の名婦への言及は第7歌と第8歌で示されたアレテの好意にたいする感謝の念に由来するのであり⁽¹⁸⁾、また一種の気分転換となって、直後のアレテらとの場面を可能にする⁽¹⁹⁾。

一方、先行する場面との関連はどうであろうか⁽²⁰⁾。前節の分析からわかるようにテュロ、アンティオペ、レダ、イピダメイアなど2人の息子を生んだ女たちが挙げられ、母性の強調がカタログの顕著な特徴となっている。アルクメネはヘラクレスの母として、クロリスはネストルやペロの母として、エピカステはオイディプスの母として、いずれも母親の側面が強調されている。他方メガラ、エピカステ、パイドラ、プロクリス、アリアドネ、マイラ、エリピュレなど不幸な最後を遂げた女の名があげられている。このカタログですぐれた息子をもつ女と、息子によって不幸に陥った女があげられていることは、アンティクレイアと彼女の息子の場面(11, 152-224)に対しパラレルないし対比をなす⁽²¹⁾。アンティクレイアはすぐれた息子をもつ母親であり、息子への強い思慕の念のゆえに命を失ったのである(11, 202f.)。またマイラとアリアドネとは、アルテミスによる射殺のモチーフによってアンティクレイアとの対比が認められる⁽²²⁾。

先行場面との関連でいえば、カタログにおいてテバイ伝説に深いかかわりをもつ人物たちの名があげられているのは予言者テイレシアスとの関係に由来すると思われる。アンティオペの息子アンピオンとゼトスはテバイを城壁で囲んだとカタログは告げる(11, 262-265)。そしてテバイとの関連は、この都市の最も名高い王オイディプスと、彼の母であるにもかかわらず知らずに妻ともなったエピカステへの言及によって強化される。さらにこのつながりはカタログの最後に出てくるエリピュレによって一層強められる。なぜならば、『オデュッセイア』では触れられていないが、エリピュレの名は、後に述べるような、彼女がオイディプスの息子ポリュネイケスに買収された物語を聴衆に思い起こさせるからだ。

他方「名婦のカタログ」は後続場面である英雄のカタログを準備する役割

をも果たしている。アルクメネはヘラクレスの母親であり、メガレはヘラクレスの妻である。ヘラクレスの母親と妻への言及は、11, 601行以下でのこのギリシア神話中最大の英雄の登場をほのめかす。同様にパイドラとアリアドネも、すぐ後で言及される人物を暗示する。彼女たちはともにミノスの娘で、どちらもテセウスとのつながりが深い。ミノスは英雄のカタログの冒頭11, 568以下で描写される。そしてテセウスはカタログの中に含まれてはいないが、ヘラクレスと同様に、オデュッセウスよりも前に冥府訪問を敢行した英雄であることを忘れてはならない。オデュッセウスがハデスで当然会えるはずの英雄としてテセウスの名をあげている(11, 630f.)のはまさにその理由による。パイドラとアリアドネへの言及は非常に短いが、ミノスとテセウスに関係するこの2人の女の名前が告げられるのは後の場面への橋渡しのためであろう。さらにマイラの名は、男のカタログに登場する6人のうちのひとりであるシシュポス(11, 593-600)を想起させる。彼女はシシュポスの子テルサンドロスの息子プロイトスの娘であるからだ。

カタログに認められるもっとも顕著な特徴は系譜の列挙であり、とくにネストルの家系に主眼点が置かれている⁽²³⁾。最初に挙げられるテュロはネストルの祖母にあたる。彼女とポセイドンの息子ネレウスと、カタログで6番目に名をあげられているクロリスとの間に生まれたのがネストルである。クロリスの娘ペロへの求婚についての部分(11, 287-297)で比較的曖昧に語られているのは、ピュラコスの牛を引いてくるという難題をネレウスがペロの求婚者に課した物語である。この話のなかではっきりと名が告げられている人物はイピクロスであるが、カタログの最後から2番目に登場するクリュメネはピュラコスの妻であり、イピクロスの母である⁽²⁴⁾。彼女もまたイピクロスとの関連から、ネストルの一族にまつわる物語と結ばれていることがわかる。

しかしカタログの主眼はピュロスの王ネストルの家系を詳述することにあるのではない。ネレウスが課した難題への言及は一種の余談(digression)である。ホメロスにおいては一般に、逸話の長さはその内容に関連するのであり、長い余談は詩人が細部を好むからでもなく、自制心がないからでもな

く、強調のための修辭的拡大・拡張である⁽²⁵⁾。『オデュッセイア』の準主役とも言うべきテレマコスをお待する人物としてネストルは重要な役割を果たしている。しかしカタログの趣旨はネストルの一族の系譜を詳述することではなく、第15歌における予言者テオクリュメノスの出現の伏線としての役割を果たすことである⁽²⁶⁾。テオクリュメノスはテレマコスがピュロスから船出するさいに突如として現れる(15, 223)が、彼の名前は長い余談の後15, 256になってようやく告げられる。この予言者の素性について最初に知らされる情報は、彼がメランプスの子孫であるということである。メランプスはテュロと夫クレテウスの息子アミュタオン(11, 259)の息子で、ネレウスが要求した困難な仕事をやろうとした「ただひとりの尊い予言者 $\phi\acute{\iota}\omicron\varsigma \dots \mu\acute{\alpha}\nu\tau\iota\varsigma \acute{\alpha}\mu\acute{\upsilon}\mu\omega\nu$ 」(11, 291)である。第11歌のなかでは彼の名前ははっきりとは告げられず、ほのめかされているだけであるが、「名婦のカタログ」と第15歌とをつなぐ重要な人物なのである。

11, 287-297と15, 223-255の二つの余談が結合されることによって初めてネレウスの難題は一つのまとまった物語を形成する⁽²⁷⁾。テオクリュメノスの導入は、「名婦のカタログ」におけるメランプスの暗示(11, 291)やイピクロスの家畜への言及(11, 289f.)によって入念に準備されている。それによって彼の出現はあまりにも突然であるにもかかわらず、違和感と唐突さは払拭されるのである。その意味で「名婦のカタログ」の登場人物の人選は、第15歌を円滑に導入する仕掛けとなることを意図したものと言えよう。

最後に、カタログのしんがりをつとめるエリピュレについて一言述べておく必要がある。彼女が1番あとに置かれているのは詩人の意図的な配置である。というのは一つには、アンピアラオスとの関係による。エリピュレの夫アンピアラオスは先述の予言者メランプスの曾孫にあたる。すなわちメランプスの息子はアンティパテスで、その息子はオイクレスであり、オイクレスの子がアンピアラオスである。メランプスは、カタログの最初に登場するテュロと夫クレテウスの間に生まれたアミュタオンの息子であるから、テュロの孫にあたる。従ってエリピュレは夫を通してテュロやクロリス、ペロなど

と同じ一族に属していることになる。この婚姻関係による系譜のゆえにエリピュレの名は「名婦のカatalog」の冒頭を思い起こさせ、カatalogをいわば円環的に完結させる機能をもつことになる。

また一つにはエリピュレの名はクリュタイムネストラの裏切りを想起させる。エリピュレはクリュタイムネストラと同じく、欺瞞によって夫を死に至らしめた人物である。彼女はオイディプスの息子ポリュネイセスが賄賂として贈った黄金の首飾りで買収され、夫を欺いてテバイ遠征に参加させた。その結果、アンピアラオスはテバイで命を落とした。エリピュレへの言及は聴衆に直ちにこのエピソードを思い起こさせ、同時に、欺瞞によって夫を死に至らしめたという共通点をもつクリュタイムネストラをも連想させただろう。妻の奸計によって殺害されたアガメムノンの不幸は、『オデュッセイア』全篇を通じて、貞節な妻をもつオデュッセウスの幸福と対比される重要なテーマである。アガメムノンの亡霊はオデュッセウスに、妻がアイギストスと共謀して自分を殺したことを語る（11, 405－439）。エリピュレへの言及が「名婦のカatalog」の最後に配置されていることによって、そのすぐ後のこのアガメムノンの話は無理なく準備されるのである。

他方エリピュレのエピソードは内容の点ではアガメムノンの場合と類似しているが、表現の点では、アガメムノンの次に登場するアキレウスとの対話に同一の言葉が見出される。このエピソードはカatalogの中ではなく、先述のテオクリュメノスの導入部（15, 244－247）で明記される。その中で、首飾りによるエリピュレの買収は「女の贈り物ゆえに $\gamma\upsilon\upsilon\alpha\acute{\iota}\omega\nu\ \varepsilon\acute{\iota}\nu\ \varepsilon\kappa\alpha\ \delta\acute{\omega}\rho\omega\nu$ 」（15, 247）と表現される。この言い回しは11, 521とまったく同じである。息子の消息を尋ねるアキレウスに向かってオデュッセウスはネオプトレモスの戦地での活躍ぶりを告げる（11, 505－537）。ネオプトレモスがエウリュピュロスを剣で打ちとったことを述べたあと、エウリュピュロスとその部下たちが死んだのは「女の贈り物ゆえに $\gamma\upsilon\upsilon\alpha\acute{\iota}\omega\nu\ \varepsilon\acute{\iota}\nu\ \varepsilon\kappa\alpha\ \delta\acute{\omega}\rho\omega\nu$ 」（11, 521）であったとオデュッセウスは言う。この言葉は古註家によって2通りの解釈がなされているが、エウリュピュロスの妻または母であるアステュオケをプリアモスが黄金でできた葡萄の木の贈り物で買収して、彼女の夫または息子を

トロイアへ出征させたという話を暗にさすものと解釈される⁽²⁸⁾。このエピソードはエリピュレがアンピアラオスをテバイに出征させた話と非常によく似ている。11, 521の「女の贈り物ゆえに」はその少し前の「名婦のカatalog」で告げられたばかりのエリピュレを思い出させるとともに、第15歌での彼女のエピソードをつなぐ役割を果たしている。従って、文脈が異なるとはいえ、これらの箇所では同一の表現が使われていることは、単なる偶然や韻律上の要請によるものというよりもむしろ詩人の意図的なものであると考えられる。

このようにエリピュレへの言及はカatalogを円環的に完結させると同時に、後続のアガ멤ノンやアキレウスとの対話場面を準備し、さらに第15歌でのテオクリュメノスの登場の伏線にもなっているからこそ、「名婦のカatalog」の最後に置かれているのである。

註

テキストはT.W.Allen ed., *Homeri Opera* III 1917², IV 1919², O.C.T.を使用した。

(1) 11, 328-84. F. Focke, *Die Odyssee*, Stuttgart-Berlin 1943, 140-144 や R. Merkelbach, *Untersuchungen zur Odyssee*, München 1969², 190 などはこの箇所を改竄とみなしている。しかし, W. Büchner, "Problem der homerischen Nekyia", *Hermes* 72 (1937), 107ff. ならびに H. Erbse, *Beiträge zum Verständnis der Odyssee*, Berlin-New York 1972, 27ff., さらに H. Eisenberger, *Studien zur Odyssee*, Wiesbaden 1973, 178-181 などはこの場面を認めている。

(2) 11, 568-627. この箇所はアリストアルコス以来改竄とみなされる。U. von Wilamowitz-Moellendorff, *Homerische Untersuchungen*, Berlin 1884, 199-226 や D. L. Page, *The Homeric Odyssey*, Oxford 1955, 26-27, そし

て G. S. Kirk, *The Songs of Homer*, Cambridge 1962, 236-237 および P. von der Mühl, "Zur Erfindung in der Nekyia der Odyssee", *Philologus* 93 (1938), 3-4なども同様である。

(3) Wilamowitz, 147-151 や Focke, 217-222 のように「名婦のカタログ」を改竄とみなす学者もいるが Büchner, 107 や A. Heubeck, *Der Odyssee-Dichter und die Ilias*, Erlangen 1965, 33-35, また Erbse, loc. cit. は真正の語句と認めている。

(4) W. J. Woodhouse, *The Composition of Homer's Odyssey*, Oxford 1969, 43-44.

(5) 23, 306-343. オデュッセウスはテイレシアスの予言を求めてハデスに向かい、かつての戦友たちや母に出会ったことを 23, 322 以下で語るが、過去の名高い女たちや英雄との邂逅については沈黙している。しかしこの事実は「名婦のカタログ」が後に挿入されたことを証明する十分な根拠ではない。(岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』創文社 1988, 358頁)

(6) 状況は異なるが, 17, 513-21でエウマイオスもオデュッセウスの語り口の巧みさをほめたたえる。

(7) ἰ'δ ο ν [235, 260, 266, 271, 321, 326, 568] , ε ἰ'δ ο ν [281, 298, 576] , ἔ σ ι δ ο ν [306] , ε ἰ σ ε ν ὀ η σ α [572, 601] , ἔ σ ε ἰ'δ ο ν [582] , ε ἰ σ ε ἰ'δ ο ν [593] .

(8) テュロ(235-59)は25行, ヘラクレス(601-27)は27行でほぼ同じ長さ。ただし602-4 は古代から疑問視されている。

(9) Heubeck, loc. cit..

(10) B. Fenik, *Studies in the Odyssey*, Wiesbaden 1974, 145-146.

(11) このうちイピダメシアの息子たち以外は双生児。

(12) ここではカストルとポリュデウケスはデュンドレオスの息子とされるが, ヘシオドス断片(fr. 24 M-W)は彼らの父をゼウスとしている。「名婦のカタログ」とヘシオドス作とされる断片作品『エホイアイ』の関連については稿を改めて論じたい。

(13) Wilamowitz, 149.

(14) Fenik, 144.

(15) W. Kühlmann, Katalog und Erzählung (diss. Freiburg im Breisgau 1973), 62-65. (ただし A. Heubeck & A. Hoekstra ed., A Commentary on Homer's Odyssey II, Oxford 1989, 91 による)。

(16) Page, 35-38.

(17) たとえば Focke, 217ff..

(18) Büchner, 72, 107-106.

(19) Eisenberger, 177.

(20) 「名婦のカタログ」は, 11. 36-43, とりわけ $\nu\acute{\nu}\mu\phi\alpha\iota$ (38) によって準備される。

(21) 岡, 前掲書, 359 頁. 類似の指摘は G.E. Dimock, The Unity of the Odyssey, Amherst 1989, 153 にも見出される。

(22) 岡, 前掲書, 360 頁.

(23) M. van der Valk, Beiträge zur Nekyia, Kampen 1935, 104.

(24) クリュメネという名前は「名高い女」を意味し同名の女性は何人いるが, Od. 11, 326 古註と『ノストイ』断片 4 によるとイピクロス之母とされる。

(25) N. Austin, "The Function of Digression in the Iliad", GRBS 7 (1966), 295-312.

(26) テオクリュメノスは分析派によって (たとえば Page, 87-88) 余計な登場人物とみなされている。しかし, Erbse, 53-54 は彼の出現の正当性を擁護する。W. B. Stanford, The Odyssey of Homer II, London 1958², 248 はここで語られている伝説は聴衆によく知られていなかったと推測するが, 逆に Hoekstra, 245 はよく知られていたと考える。

(27) Fenik, 235-236.

(28) 岡, 前掲書, 209 頁.